

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアゲルの蒼い空 19

ヌルさんからの連絡 2

ABCには、無事BCに到着したことと、僕が今日はBC泊まりにすることを無線で伝えた。実は今日でラマダン8日目だとのことである。ラマダンとはイスラム暦の第9月に行われる断食のことである。この月の間、イスラム教徒は重要な義務のひとつである「断食」を行う。この一ヶ月間は、日の出ている間は飲み物を含め一切の食べ物を摂らず、日没から日の出までの間に一日分の食事を摂る決まりになっている。純粹太陰暦であるイスラム暦は、閏月による地球が太陽を回る周期との補正を行わず、一ヶ月が29日の月と30日の月を交互に繰り返していくため、1年間で354日となるので、1年ごとに11日ほど太陽暦とずれて行く。たまたま今年は8月1日から30日までがラマダンに



持ち下ろした全装備と余った食糧 (RC)

あたったというのである。敬虔なムスリムであるヌルさんは、もちろんこの戒律を厳密に守っている。しかし、BCについて僕のために、自分は食べないラグ麺を作って待っていてくれ、ビールを勧めてくれた。申し訳ないが、ありがたかった。

夜も日が沈むまでは食事をしないので、夕食の時間も遅くなる。気を遣ってくれたヌルさんは僕のためにわざわざ早く夕食を用意してくれたが、「せめてそのくらいは我慢します。」と、日没とヌルさんの食事前の礼拝を待って一緒に食事をした。「明日は皆さん下りてくるので、一緒に登頂祝いをしましょう。もっとうご馳走します。」ということだったが、久しぶりに生野菜をたっぷり使った食事は本当に美味かった。その晩は、グリさんも交えヌルさんと3人でゆっくり登頂までの話をしたり、ヌルさんの話を聞いたりした。ヌルさんからは新疆登山協会の裏話を聞いたりしたが、興味深いものだった。

登山活動の終了

8月9日、ラマダン9日目のヌルさんの生活に合わせ、まだ真暗い4:30に食事を済ませた。いくら文化とはいえ、この高度で日中水分の補給なしで過ごすのは容易でないはず。ましてその状態で、一昨日は僕らのために、標高5000mを越えるABCまで上がって来てくれたのだと思うと頭が下がる。食事を済ませてしばらくして、あたりが明るくなってきたのを見計らってABCへと登る。このくらいの高度はもうあまり苦しさを感ぜない。たった1時間25分でABCまで登ってしまった。まだ6:30、ABCでは食事がようやく終わったところ。まさに朝飯前の一仕事だった。

昨日、BCでヌルさんと話した内容をみんなに伝え、しばらくゆっくりしたところで、これまでずっと張りっぱなしであったABCテントを撤収する。荷下げは明日まで続く

が、今日は全員がBCに下るので、もうこのテントは役目を終えたのだ。17日間張りっぱなしだったテントは崑崙の細かい砂塵がたっぷりこびり付いていて、払っても払っても落ちなかった。いよいよ登山が終わるのである。

BCに下りると、ヌル、グリ両氏が高台まで迎えに出てくれた。隊長が深々とお辞儀をしてお礼をした後、ヌルさんと抱き合っている。全員のBC安着を祝ってヌルさんには悪いが早速ビールで乾杯。疲れと開放感に高所ということもあって一気に酔いが回り、午後は惰眠をむさぼった。しかし全く日陰がないので、昼間の暑さという半端ではない。一段落したあとは、みんな真っ裸で川へ飛び込んで身体を洗った。

夕食は7:30、卵とトマトのオムレツ、ジャガイモとにんじん・羊肉の煮物、キャベツのウイグル風炒め、フライドポテト、ご飯、デザートはスイカにハミ瓜。ヌル料理のフルコースをあっという間に平らげた。半月ぶりのBCで開放感と充実感にひたりながら、登山についての話がとめどもなく続いた。

8月10日。今日で、登山活動は完全に終了となる。最後の荷下げのために、出かける。もうこの山と本当にお別れである。隊長を先頭にして、僕はいつものようにしんがり歩いて行く。今まで気づかなかった小鳥、蝶、風化がもたらした不思議な形をした岩の造形物などが目につく。2時間でABCに到着した。昨日下るときに燃やしたゴミを埋めた。ザックにすべての荷物を詰め込んで出発準備が完了すると、みな思い思いに氷河を見つめ感慨にふけっている。思えばこの半月、常にこの氷河と向き合って生活してきた。

最後の荷物は総量でおよそ80kg。一人当たり15kg見当である。多少は若い隊員に負担を掛けているが、それでも60を越えた隊長もそれほど少ないわけではなく、みんなで手分けして背負った。いい隊だと思つづく感じさせられたことだ。11:10ABCを後にした。13:45BC到着。山内君が帰らざるを得ないというアクシデントはあったが、すべての登山活動を終え、全員が無事BCに到着することができた。登山を無事終えることができたということは何より嬉しかった。

13:45にはBCに帰着。昨日ほどの風はないが、雲一つない青空の下、全く日陰になるものがないのでとても暑い。4500mの標高とは思えない。しかし、湿度が全くないので、べたつき感がないのは救いである。入山以来ずっと着たきり雀であった衣服もべたべたしないのだ。しかし、もう登山も終わり。日本の友人から佐藤君のメールに登頂を祝うメッセージが入っていた。信毎では12日に登頂までの足跡を追ったグラフ特集を組むと



BCのキッチンテントで

かで、佐藤君がせわしく原稿を整え、写真を送っている。デスクから隊員とヌルさんが談笑している風景の写真が所望されたとのことで、急ごしらえでリクエストに応えた写真撮影会が行われ、早速送られた。夕食後は、山の歌をみんなで歌って大いに盛り上がった。21:30、キッチンテントから就寝用テントに戻ろうとして、空を見上げると空には10日の月がかかり我々を明るく照らしていた。